

ひら
披かれる聖典、披かれる古代釈義

—アンティオキア派による「古代イスラエル」

近代聖書学による「アンティオキア派」の受容—

東京大学 総合文化研究科 地域文化研究専攻

日本学術振興会特別研究員 DC1

砂田恭佑

しばしば、事物の不断なる変転のもと、過ぎ去ったものが、あるいは同じように、あるいは少しく姿を変えて、再び現れる。……たしかに文法的解明がはねつけられることはないが、それらを差し置き、倫理的釈義が懲通した批判哲学の手續きに従って、新プラトン主義哲学の精神のもと秘義的観念が追求される……そうしてアレクサンドリア学派の古い時代が来復する——なるほど教会の揺籃期には忍耐することができたが、今となつては、教会が成人の齢に達するほど成熟したあとでは、福音による教えの純粹さを名状しがたく害してしまうであろう、アレクサンドリア学派の古い時代が。……だから私はそれに劣らずキリスト教的東方に広まっていたもう一つの学派について、……すなわちアンティオキア学派について簡潔に語りたい¹。

フリードリヒ・ミュンター『アンティオキア学派論』（1813）

はじめに：聖書解釈とは

○キリスト教は初めから旧約解釈をその核心部を含む

・イエスは旧約に預言されているメシア＝キリスト（信仰告白）

¹ „Oft erscheint, bey dem ewigen Wechsel der Dinge, das Vergangene, bald in gleicher, bald in wenig veränderter Gestalt wieder. [.....]. Zwar verwirft man die grammatische Erklärung nicht ganz, aber man setzt sie zurück und sucht, nach dem Vorgange der kritischen Philosophie, welche die moralische Interpretation empfahl, mystische Ideen im Geiste der neuplatonischen Philosophie [.....]. Und so kehren denn die alten Zeiten der alexandrinischen Schule zurück, die man zwar in der Kindheit der Kirche dulden konnte, die aber jetzt, nachdem die Kirche zum männlichen Alter herangereift ist, der Reinheit der evangelischen Lehre unbeschreiblich schaden würden, [.....] so will ich von einer andern Schule, deren Ruf nicht weniger im christlichen Oriente ausgebreitet war, [.....] nämlich von der antiochenischen kürzlich reden“ Münter (1813), S. 1-2. 傍線は発表者による。同著者によるラテン語版は Münter (1811)を参照のこと。なお本節中に言及されている「批判哲学」とはカントの提唱した特に特有の聖書解釈にもとづく倫理哲学を指すようである。

・イエス自身による旧約解釈。律法も預言もイエスにおいて成就＝完成した（マタイ福音書等）

・しかし.....福音と十字架を核とする「新たな契約」（新約）は「古い契約」（旧約）を更新するものである（パウロ）。「文字は殺し、霊は生かす」（II コリ 3:6）

☆この旧約聖書とは「七十人訳聖書」（Septuaginta, LXX）のこと。もともとヘブライ語+一部アラム語で書かれた諸文書を、前3-1世紀にかけてアレクサンドリアのユダヤ人学者たちがギリシア語訳し、ギリシア語で書かれたいくつかの文書を足したもの。

→聖典翻訳の問題。語彙、文法、不明瞭性

○ヘレニズム文化との関係。地中海全域に広がるヘレニズム文明.....言語、文化、哲学思想 etc.

・「異邦人」布教、護教、.....

・ギリシア語圏にはすでに「古典」（ホメロスの叙事詩等）を読解する技法が蓄積。文法的註釈、寓意的解釈（アキレウス⇒太陽、アガメムノン⇒空気、ゼウス⇒理性、神々の戦い⇒諸元素の離合、云々）

→アレクサンドリアのユダヤ人フィロンは律法を寓意的に解釈

⇒体系的な「論」を正典に含まないキリスト教は、成立時点から様々な方向を意識して聖書解釈を行う必要に迫られていた。

○「学派」における聖書解釈

・聖書釈義・神学をそれぞれ共有するアレクサンドリア派とアンティオキア派という大きな流れが知られる

◆アレクサンドリア派

・哲学・文献学の都市であるアレクサンドリアを背景に栄える。クレメンス（150頃-215頃）、オリゲネス（180頃-253/4）、ディデュモス（313頃-398頃）、キュリロス（374頃-444）

◆アンティオキア派

・シリア大都市・オリエンス道の都アンティオキアを中心に栄えた神学・聖書解釈を共有する教会勢力。しばしば学派 school と言われるがそれは実態に則さない²

・メンバー（変動あり）

² 冒頭引用した Münter も、ディオドロスが教えた修道院学校を除いてアンティオキア派が一貫した機構としての school を持っていなかったことは認めている。

+タルソスのディオドロス (330頃?-390以降)

...アンティオキアで司祭、聖書解釈などを教える修道共同体を率いたのちタルソス主教に (378)

+モプスエスティアのテオドロス (350頃-428)

...ディオドロスの弟子。モプスエスティアの主教として聖書解釈で令名を馳せた。最も極端な聖書積義を行ったことで知られる

+ヨアンネス・クリュソストモス (347頃-407)

...ディオドロスの弟子。アンティオキアで司祭を務めたのちコンスタンティノポリス大主教に。説教の巧みさで知られ (クリュソストモス=金の口)、アンティオキア的積義を実践的に生かしたと評される

+キュロスのテオドレトス (393頃-457頃)

...アンティオキアに生まれキュロスの主教に。直接の師弟関係はないが神学の面でディオドロス・テオドロスの説を継承した。聖書解釈の面では穏健なアンティオキア派として知られる

・通説：寓意 (アレゴリー) を否定し、字義的・歴史的な解釈を好む。しばしば予型論も用いる

※ラテン教父であるヒエロニムス (347-420)³やアウグスティヌス (354-430)⁴が聖書解釈の原理を整理した際、歴史・字義的解釈をその最も初歩的な段階においた⁵ (文字：霊を字義：寓意に移し替え)。この見方が西欧でのアンティオキア派観にも影響

1. 近代における「古代」アンティオキア派聖書解釈受容

○一つの記述

いくつかの現代の研究がテオドロスに対し「大いに誤解された現代の神学と聖書積義の先駆者として追従する傾向を示している」ことは驚くべきことではない⁶。

聖書に対する「歴史的」あるいは「字義的」アプローチは「ネストリオスの」キリスト論に対する養子説という誤解と同等にテオドロスのようなアンティオキア派の思想家を当代のプロテスタントの人々に心地よいものとしてきた⁷。

→いずれも Patterson (1926) に対する評。

☆背景：プロテスタント諸派におけるテオドロス・ネストリオスの高評価

³ カトリック教会で公式聖書となったラテン語『ウルガータ聖書』の訳者・改訂者として有名。アンティオキアやベツレヘムを初め東方でも活動した。

⁴ 北アフリカの都市ヒッポの司教。著作の影響力でいえばラテン教父中最大の人物。

⁵ 出村・宮谷 1986, 181, 188 頁。

⁶ "[I]t is hardly surprising that some modern studies display a tendency to adulate Theodore as a much misunderstood forerunner of modern theology and exegesis." Young2010, p. 262.

⁷ "An 'historical' or 'literal' approach to scripture as well as an adoptionist misunderstanding of 'Nestorian' Christology has made Antiochene thinkers such as Theodore more palatable to contemporary Protestants." Becker2006, p. 33.

- ・ Jean Bruguier de Lille (改革派) ら：匿名パンフレット、ネストリオスが正統でキュロスが異端 (1645) ⁸
- ・ Johann August Ernesti (福音主義)：ディオドロスやテオドロスは理性的に聖書を解釈していると称賛 (1773) ⁹
- ・ Friedrich Münter (ルター派)：アンティオキア派全般への高評価 (1813) ¹⁰
- ・ Heinrich Kihn (カトリック)：「解釈者」としてのモプスエスティアのテオドロスを(半)アレイオス派異端と切り離し、西方で尊重されたユニッルスと結びつけて正統に復帰させようとする試み ¹¹
- ・ ネストリオスの断片集成、翻訳 (1905-10) ¹²

☆☆なぜ？さらに背景：アレクサンドリアとアンティオキアの様々な対立。モプスエスティアのテオドロスは弟子のネストリオスが異端宣告されたこと (431年、エフェソス公会議) に連座し (?) 死後 150 年経って師匠のディオドロスもろとも異端宣告を受けた。その嫌疑はキリストの神性と人性を峻別し (「人性しか認めない」=養子説は間違い) マリアをテオトコス (神の母) ではなくクリストコス (キリストの母) と呼ぶことを提案。テオドロスの異端宣告条項には聖書解釈に関わる内容も含まれる

→史的イエス、マリア崇敬批判などを共有するプロテスタントには魅力的。それが聖書解釈にも及ぶ

- ・ 実際は？焦点：旧約の扱い

2. アンティオキア派における「古代イスラエル」と「旧約」

- ・ 対照：アレクサンドリア派
.....寓意。旧約には隠された意味 名前、数、象徴のシンボリズム
- ・ アンティオキア派：寓意を批判→低次？
.....対立軸の一方しか反映しない ¹³

☆哲学的異教徒 (例：ユリアヌス帝)：ホメロスにおける戦争の描写は真の出来事ではなく、より隠された真の意味 (寓意) があるとする (A)

←→モーセ五書など旧約聖書は明白な低次の意味しか持たない (B)

⇒オリゲネスら：B を否定。聖書にも隠された意味あり (C)

⁸ Brugier et al., 1645. Cf. Bevan2015, p. 207.

⁹ Ernesti, "Narratio critica de interpretatione: prophetiarum messianarum in ecclesia Christiana", Opuscula Theologica, pp. 495-530.

¹⁰ Münter1811, 1813.

¹¹ テオドロスとユニッルスの結びつけに関しては、Becker2006, p. 31-33.

¹² Bevan, loc. cit.

¹³ Ondrey2018, p. 28.

⇒アンティオキア派：Aを否定、異教文学はフィクション。むしろ旧約聖書は真の歴史。Cも否定。寓意は歴史性を破壊する

→「古代イスラエルの歴史」たる旧約の歴史性を主張する意味は？

◇近代高等批評・歴史主義の先駆者なのか？

○テオドロスの例

- ・旧約におけるメシア預言を読み込むことを極端に制限する
 - ヨナはキリストの予型
 - ザカリアはまずはゾロバベルへの預言¹⁴
 - ←→キュリロス：すべてキリストを語っているとす
- ・旧約聖書は三位一体の「一」、新約聖書（マタ 28:19）は「三」を啓示
 - ←→アウグスティヌス（アレクサンドリア寄り）

○その神学的動機

・知識を制限され死に服従していた旧約時代の人間の状態（κατάστασις）とキリストの受肉に始まる「現在」の状態を対比し、さらにいまだ悪と死の存する「現在」と来世の浄福な「状態」を対比

→終末論的動機

- ・アレイオス派的曲解（旧約を根拠に父>子を説く）を防ぐ
- ・典礼共同体の救いに関する型を厳密に限定する¹⁵

例：ミカ書 4:1-3：「終わりの日に主の家の山は顕現し、山々の頂の上に備えられ、峰々の上高くそびえる。人々はそこに向かって急ぎ、多くの民が馳せ参じる。彼らは言う。<さあ、主の山に登ろう、ヤコブの神の家へ。主の道はわれわれに示され、われわれはその小道を歩む>。主の言葉はエルサレムから出る。主は多くの人々の中に立って裁き、遙か彼方まで、力強き民を吟味される」。

→キリスト教において礼拝の場所の規定は破棄される（cf. ヨハ 4:24）ことを根拠に、これはメシア預言でも予型でもない断定¹⁶

・しかし：預言が旧約内で成就することは頻繁に認める。新約 or ドグマに結びつけることなく慎重に解きほぐした「古代イスラエルの歴史」も、神の配慮、倫理、警告を引き出し、「我々」（キリスト教共同体）が与えられているそれより善きもの¹⁷を想起するのに役立つ

……神の命令（律法）を遵守するかどうかで動かされる古代イスラエルの歴史の、独自

¹⁴ 出村・宮谷前掲書, 160 頁。

¹⁵ 秋山 2001, 60-63 頁。

¹⁶ PG66, 364D-365B.

¹⁷ *ibid.*, 317C.

の価値

○「字義」「歴史」は絶対的原理か？

・テオドロスによる「解釈者」と「説教者」の役割の違い。前者は意味を明白にする、後者は明白な意味に基づいて語る

→ヨアンネス・クリュソストモス：説教でこれを実践？

→テオドレトス：キリスト教共同体にふさわしい型を拡大

まとめ

・一旦は歴史の影に隠れた「アンティオキア派」を近代聖書研究者の一部は手放しで称賛したが、彼らの実際の聖書解釈にはより複雑な神学・司牧的意図があった

・アンティオキア派に着せられた他の特性。アリストテレス的……

・二重に「古代」が注目された。そこには受容側の様々な需要

《参考文献》

《原典（抄）》

PG: Migne, J. P. (ed.), *Patrologia Graeca*, 162 vols., Paris, 1857-66.

ディオドロス

『詩篇註解』

Olivier, J.(ed.), *Diodorus Tarsensis; Commentarii in Psalmos t. I, Ps. I-L (Corpus Christianorum Series Graeca 6)*. Turnhout: Brepols; Leuven University Press, 1980.

Hill, R. C., *Diodore of Tarsus: Commentary on Psalms 1-51*. 2 vols. Atlanta, Ga.: Society of Biblical Literature, 2005.

テオドロス

『十二小預言書註解』

Swete, H.B., *Theodori Episcopi Mopsuesteni in Epistolas B. Pauli Commentarii: The Latin Version with the Greek Fragments*, 2 vols. Cambridge: Cambridge University Press, 1880, 1882.

『詩篇註解』

Devreesse, R.(ed.), *Le commentaire de Théodore de Mopsueste sur les Psaumes [Texte imprimé] : I-LXXX*. Città del Vaticano: Biblioteca apostolica vaticana, 1939.

Hill, R. C., *Theodore of Mopsuestia; Commentary on Psalms 1-81*. Atlanta, GA: Society of Biblical Literature, 2006.

『ヨハネ福音書註解』

Vosté, J.-., *Theodori Mopsuesteni commentarius in evangelium Iohannis Apostoli*. Paris: E Typographeo Reipublicae, 1940.

ヨアンネス・クリュストモス

『創世記講話』

Brottier, L., *Jean Chrysostome : Sermons sur la Genese*, Paris: Édition du Cerf, 1998.

『マタイ福音書講話』

Field, F., *Sancti Patris Iohannis Chrysostomi archiepiscopi Constantinopoli Homiliae in Matthaeum*, 3 vols. Officina Academica: Cambridge, 1839.

テオドレトス

『八書質疑集』

Hill, R. C., *Theodoret of Cyrus; The Questions on the Octateuch*, 2 vols. Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 2007.

『詩篇註解』

Hill, R. C., *Theodoret of Cyrus: commentary on the Psalms, Psalms*, 2 vols. Washington, D.C.: Catholic University of America Press, 2000.

《二次文献》

Ashby, G.W., *Theodoret of Cyrrhus as Exegete of the Old Testament*. Grahamstown: Publications Department Rhodes University, 1972.

Bevan, G., "Nestorius of Constantinople", in: Parry, K. (ed.), *The Wiley Blackwell companion to patristics*, Wiley Blackwell, 2015, pp. 197-210.

Bruguier, J. et Derodon, D., Gaillard, G. (eds.), *Disputatio De Supposito : In Qua Plurima Hactenus inaudita de Nestorio tanquam Orthodoxo, & de Cyrillo Alexandrino, aliisque episcopis Ephesi in synodum coactis tanquam haereticis demonstrantur, ut soli Scripturae sacrae infallibilitas afferatur*. Francofurti (Frankfurt), 1645.

Ernesti, I.A., *Opuscula Theologica*. Lipsia (Leipzig): casparus fritsch, 1773.

Guinot, J., *L'exégèse de Théodoret de Cyr*. Paris: Editions Beauchesne, 1995.

———, J-N., "Theodoret of Cyrus (CA. 393-458)", Kannengiesser, C. and with special contributions by various scholars, in: *Handbook of patristic exegesis: the Bible in ancient Christianity*, 2 vols. Leiden: Brill, 2004, pp. 885-918.

———, J-N., *Théodoret de Cyr exégète et théologien; le dernier grand exégète de l'école d'Antioche au Vesiècle*, 2 vols. Paris: Les Éditions du Cerf, 2012

Hovhanessian, V., *The School of Antioch: biblical theology and the church in Syria*. New York: Peter

- Lang, 2016.
- Kannengiesser, C. and with special contributions by various scholars, *Handbook of patristic exegesis: the Bible in ancient Christianity*, 2 vols. Leiden: Brill, 2004.
- Kelly, J.N.D., *Golden Mouth: The Story of John Chrysostom—Ascetic, Preacher, Bishop*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1972.
- Kihn, H., *Theodor von Mopsuestia und Junilius Africanus als Exegeten : nebst einer kritischen Textausgabe von des letzteren Instituta regularia divinae legis*. Freiburg im Breisgau: Hrder'sche Verlagshandlung, 1880.
- Martens, P.W., "Adrian's Introduction to the Divine Scriptures and Greco-Roman Rhetorical Theory on Style", *The Journal of religion*, 93 (2), 2013, pp. 197-217.
- Münter, F., *De Schola Antiochena*, Hafnia (Kopenhagen): Orphanotrophium Regium, 1811.
- , „Über die Antiochenische Schule“ in: Stäudlin, C.F. und Tzschirner, H.G. (Hrsg.), *Archif für alte und neue Kirchengeschichte*, Leipzig, 1813.
- O'Keefe, J.J., "A Letter that Killeth": Toward a Reassessment of Antiochene Exegesis or Diode, Theodore, and Theodoret on the Psalms. *Journal of Early Christian Studies; The Johns Hopkins University Press*, 8 (1), 2000, pp. 83-104.
- , "Theodoret's Unique Contribution to the Antiochene Exegetical Tradition: Questioning Traditional Scholarly Categories", B. And Kolbet, P. R. (eds.), ed, *The Harp of Prophecy: Early Christian Interpretation of the Psalms*. Notre Dame: University of Notre Dame Press, 2015, pp. 191-203,
- Ondrey, H.T., *The minor prophets as Christian scripture in the commentaries of Theodore of Mopsuestia and Cyril of Alexandria*. Oxford University Press, 2018.
- Patterson, L., *Theodore of Mopsuestia and modern thought*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1926.
- Rondeau, M., *Les travaux des pères grecs et latins sur le Psautier: Les commentaires patristiques du Psautier: IIIe-Ve siècles, v. 1*. Vatican: Pont. Institutum Studiorum Orientalium, 1982.
- Quasten, J., *Patrology, III: The Golden Age of Greek Patristic Literature From the Council of Nicaea to the Council of Chalcedon*. Westminster, Maryland: Christian Classics, Inc., 1983.
- Wallace-Hadrill, D.S., *Christian Antioch: a study of early Christian thought in the East*. Cambridge [Cambridgeshire], New York: Cambridge University Press, 1982.
- Young, F.M., Tradition of exegesis. In: J.C. PAGET, ed, *the new cambridge history of the bible Volume 1: From the Beginnings to 600*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 734-751, 2013.
- Young, F.M. and Teal, A., *From Nicaea to Chalcedon: A Guide to the Literature and its Background Second Edition B*. 2nd edition edn. Michigan: Baker Academic, 2010 [1983].

2019年10月25日
第3回 駒場人文学研究会

- 内山勝利編『哲学の歴史 第2巻: 帝国と賢者』中央公論新社、2007.
- 小高毅『原典キリスト教思想史〈2〉: ギリシア教父』教文館、2000.
- ゴンザレス, J. 『キリスト教思想史Iキリスト教の成立からカルケドン公会議まで』新教出版社, 2010[1970].
- ダウニー, G. 『地中海都市の興亡——アンティオキア千年の歴史』小川英雄訳, 新潮選書, 1986.
- 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史; 新約聖書から宗教改革まで』日本基督教団出版局, 1986.
- マルー, H.I. 『キリスト教史2』上智大学中世思想研究所, 1996.
- 武藤慎一『聖書解釈としての詩歌と修辭——シリア教父エフライムとギリシア教父クリュソストモス』教文館, 2004.
- 森哲彦「カント批判期の神問題」『人間文化研究』20号, 2014, pp. 83-113.